HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	19世紀後半のロシアにおける「資本主義」論争
Author(s)	山本, 敏
Citation	スラヴ研究, 3, 67-84
Issue Date	1959
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/4938
Type	bulletin (article)
Note	This article treats the period during which the question of the "development of capitalism" was discussed in the field of journalism as one of the so-called "Russian problems". But it does not cover the years when the subject of the "development of capitalism" gave rise to much controversy in the transactions of Vol'noe ekonomiceskoe obscestvo (The Free Economic Society). The main subjects of this article are 1) views expressed by the scholars who insited upon free trade in the decade of 1850-60-in comparison with those in the former ages. The materials have been drawn from the organs "Duch zurnalov", "Ekonomiceskij Ukazatel'", "Vestnik promyslennosti". The works of I.V.Vernadskij, L.Tengoborskij, I.Gorlov have been discussed in this connection. 2) views on free trade in 1860s, with regard to the work of Bervi-Flerovskij and the Protocol of the First Session of the All-Russian Commerce and Industry Conference. 3) N.K.Michajlovskij's opposition to the capitalism. 4) V.P.Voroncov's "Sud'ba kapitalizma v Rossii (The Fate of Capitalism in Russia) and Rusanov's "Protiv ekonomiceskogo optimizma (Against Economic Optimism)" 5) Daniel'son (Nikolaj-on)'s "Ocerki nasego poreformennogo chozjajstva (Outlook on our Social Economy after the Reform). The author took into his consideration the criticism of Tugan-Baranovskij on the arguments pro and con of capitalism. Generally speaking, what is traced here are the ideas and thoughts in economy, not the ones in politics. So, the author did not refer to the activities of Lavrov and Bakunin in connection with Tkacev, nor did he consider Dr.J.H.Billington's new work on Michajlovskij as a leading spokesman of the populist movement. As to these problems he hopes to treat them, if possible, in one of his subsequent articles.
File Information	KJ00000113131.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

19 世紀後半のロシアにおける「資本主義」論争

山　本　　敏

はじめに

本稿の取扱う時期は，所謂「ロシア問題」の一環として，「資本主義の発展」がロシアにおける論壇をにぎわしていた間である．しかし 90 年代の後半になって「帝国自由経済協会 (Императорское Вольное Экономическое Общество)」の機関紙 (Труды Имп. В.Э.О.) がその論争の場となる以前にとどめた．大体編年別に区切りをつけてあるが，とりあげた問題の性質上厳密に章節を分けることはできない．

私が自らに課している課題の中に，ネオ・ナロードニキ主義，とくにチャーヤノフの小農理論が殆んど抵抗らしいものもなしに明治絶対主義の中にとり入れられたことの歴史的な意味(あるいは無意味)を明らかにすることと，いわゆる「二つの道理論」の背景を整理することとがある．資料と研究の不充分なために，本稿でふれなかった Н. И. Зибер（リカルド，マルクスとの関連に於て），Н. В. Шелгунов（エンゲルスとの関係に於て）及び С. Н. Южаков（オンとヴォロンツォフとに関連して）については，続いて稿を起すつもりであるが，これら諸稿は何れも上記の目的にそったものとして構成したいと思う．本稿はこれらの諸稿とともに，上記の課題に対してはその序章の一部をなすものである．

I

1861 年の農民改革を迎えるまでの数年間におけるロシアの経済論壇は，自由貿易と保護関税論との優劣に関する以前の論争の華々しい蒸し返しによって特徴づけられる．50 年代末期の経済雑誌は，自由貿易賛否の論説を殆んどすべての号に掲げたと言っても過言ではなかろう．

自由主義の諸雑誌は，多かれ少なかれ自由貿易に賛成し，外国の工場主たちに対する関税の引下げに賛成するいくつかの論説をも掲載した．これら自由主義的諸雑誌のうち，もっとも精力的に自由貿易論を主唱したのは，И. В. Вернадский の主宰する雑誌 “Экономический Указатель” であり，保護関税主義を擁護していたのは，機関誌 “Вестник промышленности” であった．しかし，ここに繰り展げられた論争は，それ自身として格別興味を呼ぶものではない．何となれば，これらの自由貿易論にしても保護関税論にしても，大体に於て当時の西ヨーロッパ論壇の単なる引きうつしであって，そこには原理的なものが殆んど見られないからである．

ここで，50～60 年代の自由貿易論者と前の時期の自由貿易論者とを簡単に比較しておくことが，一応必要であろうかと思う．古い自由貿易論者たちは，自由貿易の増大を熱望すると同時に，農奴制，小生産，一般に農業的体制を基盤とするロシアの特殊性を信奉していた．この時期に於ては，資本主義がまだかれらの感情の中に殆んどとり入れられてい

なかった．かれらが権威あるものとして認めた西欧の著述家はシスモンディであるが，それはシスモンディが鋭く資本主義を批判したことに多くの理由があると言えよう．ところが，50 年代の自由貿易論者たちはまったく別のロシアの流れを代表していた．すなわち，“Экономический Указатель”の諸理想は，ロシアの独自の基盤という様な問題と殆んど何の関係もなかった．雑誌“Дух журналов”が好んでシスモンディを引用するのに対して，“Экономический Указатель”が盛んにフランスの自由主義経済学者バスティアのものを訳載していたことを述べれば充分であろう．この雑誌を中心とする自由主義的経済学者たちは，チェルヌィシェフスキーを先頭とする急進的な人たちと同じく，農奴制にたいして徹底的な敵意をいだいていた．もちろん，かれらが熱心に自由貿易論を唱えていたのは，“Дух журналов”の経済学者とはまったく別の動機によるものであった．

“Дух журналов”は貿本主義生産一般，とくに資本主義的工場生産をまったく否認していた．ロシアは，太古からそうであったような農耕ロシアとしてとどまらねばならぬとした．保護関税によって培養される工場制工業が，「習俗の毀損」と何世紀にもわたる祖国の体制の崩壊とをもたらすことが必至である，というのがその理由である．

“Экономический Указатель”をとりまく経済学者として，ベルナドスキーの他に少くとも И. Я. Горлов, Бутовский, Бунге の三人を挙げなければならないであろう．言うまでもなく，これら 50～60 年代の自由貿易論者たちは，最早はっきりした貿本主義体制の信奉者であった．したがってかれらは，ロシアを農耕国のままにしておくことには何程の興味ももっていなかった，かれらは，出来るだけ外国の競争を発展させれば，国内市場に於て国内の工場主たちの独占権にくるしんでいるロシア産業の発展を何よりも容易にする筈だと考えていたのである．前の時代の自由貿易論者たちとちがって，かれらの眼にうつる工場制工業は，産業のもっとも進歩的な形態であった．それが自然の発展形態であり，国際競争を排除することによってつくり出された発展ではなかった．かれらの考えによれば，保護関税主義によってでは，ロシアに自存の生活力ある工場生産をうみ出すことは不可能であった．かれらが保護関税主義に反対したのはこのような理由によるものであり，工場の出現によって駆逐されるであろう小生産への同情によるものではなかった．

もっとも，60 年代の自由貿易論者たちについても，必ずしも劃一的に語るわけには行かない．すでにニコライ時代に文筆活動をはじめた著述家たちは，工場制工業にたいする不信の念をどうしても拭いきれなかった．つまり，社会的な問題として，小生産者＝クスターリに代る工場労働者の出現を，必ずしも快く思ってはいなかった．一方，若い，進歩的な自由主義者たちにとって，古いロシアの工場主たちのもつ独占権が生産の発展を阻害していることにくらべて，資本主義的生産の害悪というようなものは物の数ではなかった．たとえばベルナドスキーのテンゴボルスキー「ロシア生産力論 (Etudes sur les forces productives de la Russie)」翻訳[1]の中から次のような言葉を見出すことができる．クスターリ生産が工場生産に優越するとするテンゴボルスキーの言葉への補註として，「農村工業は幾多の不利益があり，都市工業より劣勢である．技術的な面でも農村工業は都市工業より劣っており，その生産も劣悪である．だから，特別にこれを庇護するには価しない．

1) Л. Тенгоборский, О производительных силах России, СПБ 1858.

労働者が農耕に従事すれば，それだけ腕前が落ちるし，労働者の物質的保証は，工場において生産が少なくなればそれだけこたえる.」[1] としている．別のところで，ロシアの農耕農民が営業的な仕事（промысловое занятие）と結びつくことの有利さを説きながら，「プロレタリアートの害（язва）」にふれているテンゴボルスキーの言葉にたいして，ベルナドスキーは直ちに次のように補註している，「工場の中にいる農耕農民も不味いが，鍬をもった工場人も不味い．理想も成功も，仕事を混ぜ合せて全部やることにではなくて，その分業に於てこそある」.[2] 以上の例を以てだけしても，当時の進歩的自由貿易論者としてのベルナドスキーの立場は明らかであろうと思う．

ここで今一人，ゴルロフの見解を引合に出すことにしたい．40 年代の末にかれは，ハックスタウゼン，テンゴボルスキーと同じく次の様に言っている．「巨大な工場によって，技術をもった人たちによって，貧窮の法則によって，工場主の富裕と労働者の貧困無学とによって，（資本主義的工場）体制が国民の安泰をつくり出すことができようとは，われわれは考えない.」[3] 1841 年に「財政論（Теория финансов）」（1845 年に再版）を出したかれは，主としてカザン大学における講義ノートをもとにした「政治経済学原論（Начало политической экономии）」2 巻を 1859 年から 62 年にかけて出版した．この著作の中では，資本主義的工場生産にたいする攻撃の鉾を収めてしまって，他の自由主義経済学者たちとともに農村共同体的土地所有に反対している.[4]

1857 年，“Современник” 誌上に，当時最も著名な保護関税論者 А. Шипов の著書「紡績業とロシアにとってのその意義の重要性（Хлопчатбумажная промышленнность и важность ее значения для России）」の批評が掲載された．これは疑いもなく，チェルヌィシェフスキーの筆になるものである．この中でチェルヌィシェフスキーは，自由貿易論についての見解を明確にのべている．「わが国では，寛容の精神は発達していない．例えば自由貿易の問題について，保護制度が不利益であるとする学者の中の多数は，“反対意見は社会のためではなくて，個人的利益を考えている人々だけが信じうる” と考えている．自由貿易をどう考えるかということだけで，すべての人たちを二つに分けてみよう．一つは，尊敬すべき，賢く，学あるものであり，これは税率は低めらるべきものと考えているすべての人たちである．他の一方は，無学な，欲張りで，わが国のマニュファクチャは税によって守らるべきだと考えているすべての人たちである.」[5]

1861 年の改革そのものの中には，多くのブルジョア的要因が作用していたにもかかわらず，ロシアの社会的諸関係の中には農奴制的諸関係の残存物が，拭い去り難く残されていた．まづ，地主経営における雇役をあげねばならない．さらに，農民経済の中にあった

---

1) Там же, стр. 10.
2) Там же, стр. 18.
3) И. Я. Горолов, Начало политической экономии, СПБ. 1859 より．（Тенгоборский とともに，Тчган の引用による.）
4) ここで，ゴルロフとチェルヌィシェフスキーは，決定的にわかれてしまった．
5) “Современник” 1957 г. Том. LXIII, Рецензия на книгу Шипова, стр. 48 ツガン・バラノフスキーが「われわれの問題に明確に答えている」ものとしてチェルヌィシェフスキーのこの言葉を引用しているのは，まことに興味深いものであると思う．Туган-Барановский, Росская фабрика в прошлом и ностоящем. 1898, стр. 415.

農村共同体的土地所有であり，この現物経済から抜けきれない中世的経営形態のために，商業的，資本主義的諸関係と社会的分業との発展が著しくおくれていた．このような発育不全の性格は，可成り長いあいだ，資本主義的企業家と半農奴制的な農村から抜け出してきたばかりの雇傭労働者との間の諸関係にも見られた．

改革後の時期に，大きく浮び上ってくる問題は，農奴制の問題ではなくて，資本と労働との間の問題である．その意味で，チェルヌィシェフスキーが 1859 年に「資本と労働(Капитал и труд)」と題する論文[1]をかいて，ロシアにはじめて勤労者の経済学を提唱したことは，銘記すべきことであろう．

II

60 年代の自由貿易運動を理解するために，この運動をとりまく当時の経済情況をかんたんにのべると，鉄道建設[2]がはじまり，私営銀行その他の信用機関，多数の株式会社が創設され，一般に投機的な気運が生れはじめていた．改革による農民の土地買戻操作によって，貴族の手からあらゆる種類の金融業者の手にすばやく移された巨額の資本が，市場に放出されていた．

ゴルロフをもその陣営にふくめた 60 年代の自由貿易論者たちは，“Дух журналов”の自由貿易論者が農村貴族の利益をまもっていたようには，はっきりとした階級的立場をもっていなかった．それはつまり，擁護すべき階級としてのブルジョアジーが，まだ未成熟だったということである．

60 年代における論壇のなかから，資本主義的な工場制工業にたいする態度によって，次のような社会的グループに分けることができるであろう．まづブルジョア的流派である．これには自由貿易論者も保護関税論者も含まれ，経済的にロシアの完全なヨーロッパ化を目指していたものである．この流派が，工場制工業に共鳴していたことはもちろんである．反対に，チェルヌィシェフスキーによって先鞭をつけられたもう一方の，急進的，理想主義的な流派は，資本主義的大工場の出現に否定的で，労働の利益の名の下に，農奴制ロシアの古い経営形態を擁護していた．それにもかかわらず，当時前進的と言われたこれら二つの流派の人々には，一つの点で一致するものがあった．すなわち，来るべき社会制度のかたちとして，協同組合あるいはアルテリの原理に傾倒していたということである．この点について，とくにチェルヌィシェフスキーの態度は，言うまでもなく明確なものであった．急進主義者たちと自由主義者たちとの差異は，前者がアルテリに国家の援助を要求し，後者はそれを自由に任せていたことであろう．

この間にあって，В. В. Берви-Флеровский はどうであったか．かれの全評論活動を規定することは別の機会に譲るとして，ここではかれの主要な主張の一つを挿入するにとどめる．

---

1) И. Я. Горлов, Начало политической экономии, 2 тт. 1859-62 への書評として書いたもの．

2) 鉄道建設に非常に大きな比重をもたせることについて，Н-он, Оцерки по нашего пореформенного хозяйства, 1893 (その編別構成を見ただけでも明らかにわかる)はきわめて特徴的であり，また，Theodore H. von Laue 氏の論文 “The fate of capitalism in Russia—The Narodnik version (The American Slavic and East European Review, 1954, vol. XIII) も外すわけにはいかない．

いわゆる「ロシア問題」として提起されていた問題の中，かれの主要な関心は農業問題にあった．かれの考えによれば，中央諸県の工場制工業の発展は，住民の経済状態の向上をもたらさないばかりか，反対に貧富の両極分解を強化するのみであるとした．「工業のロシア，これは——貧困と富裕の国である．そこでは，一家族の収入が年間 300 ルーブリのとき，同時に他方では飢餓のために死んでいる．．．．そこには組合がつくられており，ストライキがおこなわれる．そこでは，資本とたたかうことのできるような，また，自分の収入を増加させることのできるような，あらゆる手段方法がこころみられている．．．．だが，かれら(工業地区の労働者たち)が現実の闘争にもっとも勇敢であるばあい，かれらにとってこのたたかいの諸条件はもっとしっかりしたものになる，かれらが相手にしているのは，富裕で強力な資本家であり，さらにもっと富み，もっと強力な土地所有者たちである．．．．農耕がわるいところ，無肥料では土地の収穫がわるくて，肥料をうるためには家畜が少く，また，工場に欠員があると，それぞれに農夫の中から三名の候補者が出るというようなところで，繁栄する工業人口というものがあり得るだろうか？」と言い，またニジェゴロド県の二つの郡——大工場のあるアルダトフスク郡とクスターリ工業のあるゴルバトフスク郡——の数字を比較して，大工業よりも小工業の方がはるかによく住民を保証していると結んでいる．

或意味では，フレロフスキーはチェルヌィシェフスキーよりも資本制工場工業の否定面をより大きく見ているということができるであろう．多くの同時代人がそうであったごとく，フレロフスキーは農業問題の背後には労働問題があって，それが相互に密接なつながりをもったものである点に，必ずしも充分な理解をもってはいなかったのではないか．この点が，かれをチェルヌィシェフキーと区別する一つのメルクマールになると思われる．ともあれ一般的に言って，この時期にいたるまでのロシアの進歩派の中には，工場についての関心と注意は余りにも少なかったと言えるであろう．農村共同体については相当数の興味ある文献が見られるが，いわゆる「ロシア問題」——資本主義の問題を，工場制工業の面から論じた文献は殆んど見当らない．

1870 年，全露工芸博覧会の際にひらかれた第一回全露商工会議の議事録[1]は，当時の自由主義者たちの態度をはっきりと浮彫りにするものとして興味深い．企業の自由への讃美が，この会議の討論のなかで主要な位置を占めている．仮りにこの時すでに，自由主義の密月期は終っていたとするにしても，ロシア社会，とくに産業界の自由主義への傾斜は，弱まらないばかりか，ますます急速に増大していたと言えるであろう．大蔵官僚 фон-Бушен の「あらゆる産業の発展にとって，第一の要件は——自由であります！」という言葉の次には，議場に沸いた「しかり！でかした！(Непременно！Браво！)」[2] という声が，補足されて記録にとどめられている．

この問題に関して 70 年代に指導的な役割を果した機関誌は "Отечественные Записки" である．この雑誌は，З. Елисеев の尨大な論文「ロシアの生産諸力 (Произво-

1) Протоколы и стенеграфические отчеты заседаний первого всероссийского с'езда фабрикантов, заводчиков и лиц, интересующихся отечественной промышленностью 1870г. СПБ, 1872 г.

2) Там же.

дительные силы России)」(1868 年 2 月号)をのせた．この論文の内容は，雑誌の性格をよく物語っているであろう．

エリセーエフの資本制工場工業にたいする攻撃は，チェルヌィシェフスキーのそれほどには迫力のあるものではなかった．かれの危惧は，もし工場が閉鎖された場合，忽ち生ずる失業者の群れを果して就業させ得るであろうかということであった．この論文の結びのなかで，かれは次のように言っている．「もし保護税率が，わが国の古くからある農奴制的な諸工場をささえていて，そのことによって無数に，しかも将来にわたって増える可能性を与えているとすれば，北部の住民は遠からず漸次，諸工場に緊縛されるものになってしまうのである．このことはもちろん，北部諸県の多少とも大きな農業者たち及び一般に資本家たちには，保証された立場を与えはするが，いろいろな諸関係に於て，これら諸県の農業人口のあらゆる将来性を無きものにし，個人的な貪欲への犠牲として何百万の田野人を国家から奪うのである.」(492 頁) 両極分解して脱農民化せんとする当時の半プロの状態を表現するものとして，かれが同じ雑誌の 1870 年 1 月号に載せた「わが国の労働者がよくなることの難しいのは何が故であるか？ (Отчего трудно поправляться нашему рабочиму?)」という論文の中から，極めて特徴的な言葉を引用しよう．それは次の様なものである．「問題は，労働者の所有する分与地が存在するかしないかということにだけではなくて，かれの所有する土地が生きて行くことを保証しているか，或は保証していないだろうか？ ということにもある.」この言葉は，当時の問題の所在をついているが，これによってもわかるように，この頃までは労働問題が単独にとりあげられることはきわめて稀で，殆んどの場合に農民問題として取扱われてきたということである．両者はまったく表裏一体の問題であるかのごとくに取扱われ，農民の土地の完全な保証を擁護することに結論が求められていた．ところが，それでは最早問題は解決しないところにまで，事態はすすんでいた．ともあれ，そこでは労働者が小所有者と同一視されていたということは指摘しておかねばならないであろう．

III

最も頑屈なかたちで資本制工場に否定的態度が打ち出されているのは，ミハイロフスキーの論文に於てである．ミハイロフスキーはこの点で，エリセーエフよりもさらに一歩ふみ出している．

「社会に労働のエレメントを供しながら一般人民(ナロード)は自己の掌中に生産手段を持たない．. . .課題は，労働を代表するものの手中に生産を集中させようということの中にある．この目的えの道を邪げるものはすべて――それが自由であろうと，工業であろうと，鉄道であろうと，大きな財政計画であろうと，自治であろうと――撃滅に価する，そしてそれが有益なことでもあり，正しいことでもあるだろう．真の自由，正しく組織された有益な工業，必要な鉄道，真の自治――これらは人民の，或は労働の利益に反してあり得ない.」[1] この様にしてかれは自分の意図を明らかにした後，労働者の問題について次のようにのべている．

1) Н. К. Михайловский, Из лит. и журн. заметок 1872 г. Соч. изд. 1896 г. Т. I, стр. 660.

「労働者（рабочий）という言葉をわが国では，西ヨーロッパにおけると同様に理解してはならない．わが国には，工場育ちの労働者は無いか，あるいは極めて少い．わが国に於ては，労働者たちが労働者階級を形成してはいないのである．．．．労働問題は，ヨーロッパでは革命の問題である．何となればそれがヨーロッパでは，労働条件の労働者の手への移譲，現在の有産者たちからの徴発を要求しているからである．ロシアにおける労働問題は，保守的な問題である．何となればここでは，労働者の手中に労働の諸条件が保持されることと，現在の所有者たちに所有権が保持されることのみが要求されている．

わが国では，ペテルブルグそのものの周りに．．．農村が存在し，そこの住民たちは自分の土地に住み，自分の木をたき，自分の穀物を食べ，自分の羊の毛でできた手製の外套や裾の長い毛皮外套（тулуп）をまとっている．かれらに，この自分のものをしっかりと保証し給え．そうしたら，ロシアの労働問題は解決される．確固たる保証というものの意味をどんな風に理解したとしても，永久に鋤（ソーハ）と三圃経営にとどまっているべきでないと人は言うだろう．そうではない．この困難からの活路は二つある．一つは，実際的な観点から認められるものであるが，まったく雑作ない，便宜なものである：税率を引上げよ．農村共同体を解放せよ，それで，多分，充分である，――工業は，イギリスの工業と同じく，キノコのごとく伸びてくるであろう．だが工業は，労働者を蚕食し，しぼりとるであろう．もう一つの方法もある．もう一つの方法は現実のなかに，だがきわめて粗野で初歩的なかたちで存在している労働と所有との諸関係の発展の中にある．この目的は，大幅な国家のてこ入れなしには達成され得ないし，そのために先づなさるべきは土地共同体の法的緊縛でなければならない．」[1]

1873 年を扱ったミハイロフスキーのもう一つの論文は，さらに興味あるものである．かれは傾向を異にするさまざまの機関紙，例えば保守派の“Гражданин”[2] と自由主義的な“Петербургские Ведомости”などが，等しく国の経済的進歩をのぞましいものとして認め，「ロシアにおける信用の発展を要求し，株式会社の増加をよろこび，祖国の工業の発展に感喜している」ことなどを指摘している．“Петербургские Ведомости”は，老朽した，新しい株式会社規則の立法調査研究組織をやめて，それを速決で公証認可する組織にかえようとする政府の決定に賛成していたが，このことについてミハイロフスキーは次のように述べている．「信用，工業，国の自然力の開発――これらすべてのことは，それ自身は素晴しい事柄である．．．．が，それにもかかわらず，若しそれらが直接勤労者階級の福祉にではなくて，ピラミット体制（王制）全体の福祉にふりむけられるならば，喜ばしくない結果が出てくる．わが祖国における信用の発達は，それが特別な方法で人民の幸福にむけられないならば，ただ人民から搾りとる手段を与えるだけである．株式会社が何等か

1) Там же.

2) “Гражданин”は Мешерский の主宰していたもので，“Русский Вестник”とともに，自由主義者から反動的な「野牛」に変って行った Катков を頂とする雑誌“Московские Ведомости”と同じコースを辿って行ったものである．これらの雑誌は，社会的にはそれ程の影響力をもっていなかったが，政府の周辺にあって，行政上は大きな比重をもっていた．80 年代の農村，農民関係の反動立法（Земский начальник に関するもの，農民家族の分与地に関するもの，農民分与地の譲渡禁止に関するもの等々）の施行については，これら諸雑誌の影響力を考慮の中に入れなければならない．

の生産をする時は，それが所在する地方の小営業を零落させ，貧窮をもたらすことが，誰の眼にも明らかである．．．．それ故に，わが租国における信用の発展と，ロシアにおける株式会社の増加と，租国の工業の発展とに反対してたたかっているあらゆる評論家たちは——ロシア人民の禍患と窮乏とに反対してたたかっているのである.」[1] このようにして，「租国の工業の発展」は，それと同等の「ロシア人民の貧困と破綻」とにはねかえってくる．したがって，「ロシア人民を破滅から救う唯一の方法は，ロシアの工業的発展をやめることである.」[2] と結んでいる．

工場労働者及び農民についてのミハイロフスキーの考察を“Дух журналов”のそれに比較すると，それは極めて相似ていることがわかる．チェルヌィシェフスキーが資本制工場による大生産とクスターリの小生産とについて，農奴制時代の保守的な経済学者たちのあいだで支配的であった見解とまったく同じ見解をもっていたことを，ここで想起しなければならない．70 年代に於て先進的な評論家と呼ばれていた人たち，そしてその代表的人物の一人ミハイロフスキーは，上記の引用によって明らかなごとく，国の経済的進歩にたいする強硬な反対者であった．資本制工業の発展に対するかれの反対論は，最早これ以上のものはないほどのところまで押進められた．

この時代のロシアの先進的な活動家たちが，経済的反動を擁護せざるを得なかったという特異な立場は，きわめて教訓的である.[3] やはり，当時のロシアの経済発展の状態は，労働問題を農民問題から切離すことのできないようなものであった．経済的発展が農民の生活条件を悪化し，小所有者農民の大部分をプロレタリア化して行くという現実を前にして，労働問題をそれだけ切離して別個に論議することはできなかったのである．経済的進歩は，それが一歩進められるごとに，理想の実現をますます困難にすると確信するに於ては，進歩的諸理想への熱烈な志向——この状態からの唯一の活路は，「空想」であった．当時の先進的と呼ばれる活動家たちは，最早すべての期待を国家権力にかけるしかなかった．かれらは，ただ国家だけがロシアの工業的発展の道を変更し，資本主義の発展を抑制することができるだろうと，言いもし書きもした．そして，農民改革以後につくり出された新しい経済条件によって力を失ってきた自分たちの主張が，再び勝利を得るであろうことを期待していたのである．だが，かれらの期待する様なことを，国家権力が実行したであろうか，また実行することができたであろうか．ここにもまた，かれらの空想主義が頭を擡げていたと言わなければならない．

IV

В. П. Воронцов—В. В. が主として“Отечественные Записки”の誌上に掲載した諸稿は，1882 年にまとめられて「ロシアにおける資本主義の運命（Судьба капитализма в России)」と題する単行本になった．この著作については，レーニンをはじめとする多くの批判があるが，19 世紀末期のロシア経済思想を語る場合の代表的著作であることは，疑

1) Н. К. Михайловский, Соч. Т. I, стр. 833-834.

2) Там же.

3) ここから，スラヴ主義者の経済思想とナロードニキのそれとの関係を強調する Богучарский の所論が引き出される．

問の余地がないであろう．かれは，ロシアにおける資本主義の発展を否定し，ロシアの社会的経済的発展の「独自性」を認めようとした．この二つの目的の中の前者は，「ロシアにおける資本主義の運命」の中で一貫した論旨を貫き通しているが，後者については遂にその目的を達成しなかった.[1]

ヴォロンツォフは，とくに経済学についての教育は殆んどうけていなかった．しかし，その危っかしい論述の中にも，するどい叡智のひらめきを否定することはできない．シスモンディのものであるが，かれがロードベルトウスのものであるとする市場理論から，かれの所論は出発している．オンと同じくかれも，資本主義生産における生産物の価値を次の三つ部分に分ける.[2] 1) 不変資本，即ち，原料や補助材料，機械や生産用具等々の形で存在していて，完成生産物の一定部分のうちに再生産されるにすぎない価値を補塡する．2) 可変資本を補塡する，即ち，労働者の生活費を償う．3) 資本家に属する剰余価値を構成する．そして，1)，2) の部分の実現(即ち，それに相当する等価の発見，市場における販売) は困難でない，何となれば，1) の部分は生産に充てられ，2) の部分は労働者の消費に充てられるからだとする．ところが，3) の部分，即ち剰余価値はどの様にして実現されるのか？剰余価値は資本家によって全部は消費されないのだ，とする．剰余価値は資本主義経営そのものの内部では実現し得ない（これがかれの誤りであったことは，今では補足するまでもなかろう）という理由によって，資本主義的生産の発展にとっては，外国市場が不可欠のものである．かれによれば，国内市場で実現され得るのは，ただ資本家が資本にたいする利潤のかたちで受取って，自ら消費する剰余生産部分か，又は労働者が労働賃金のかたちで受取る生産部分だけである．剰余価値のすべてを，同一国の資本主義的生産の諸条件の下で実現することはできない，というのである．ところが，農民の零落の結果として，外国市場をもたないので剰余価値を実現出来ないことのために，ロシアにおける国内市場は縮少するし，また，あまりにもおくれて資本主義的発展に乗り出すロシアの工場工業にとって，外国市場は手の届かぬものである．何となれば，ロシアの工業はその技術的な立ちおくれのために，ずっと先進的な西欧諸国の資本主義工業と自由市場に於て競争することはできない．ロシアの工場がそのささやかな存在を続けることのできるのは，ただ関税の保護の下に於てのみである．しかしながら関税はロシアの資本主義工業に，その一層の発展のために不可欠の条件(外国市場)を与えることができない．だから，ロシアの資本主義は基盤のないものであり，流産の運命にある．これがかれの所論の要旨であり，一般に資本主義を否定するナロードニキ主義の骨子とされている．

「一方では大生産組織化の結果としての労働生産性の未曾有の増大，他方では，結局のところ，人民の土地不足，貧窮，移民，労働者の堕落を呼びおこしたところの，この生産

1) ツガンが「最終的なかたちで，当時の支配的な経済観を表わす建設理論をつくったという一つのことが，すでに70-80年代のロシアの経済学者とヴォロンツォフ氏とを区別している」(“Фабрика”, стр. 431) として讃詞を送っているのと，Лященко がその「ロシア経済史」を改訂するに際して，ヴォロンツォフが「プロレタリアートの革命的な役割を否定する精神を裡に秘めていた」という言葉を挿入している (История народного хозяйства СССР, Т. 2. изд. 3, стр. 52-53) のとに注目しておきたいと思う．

2) Никлай-он, Очеркн по нашего пореформенного общественного хозяйства, СПБ, 1893, Отд. II, Кап. xv. とくに стр. 205, В. П. Воронцов, Очерки теоретической экономии, СПБ. 1895, стр. 179 以下.

性増大の歪められた進路．このような歪曲がおこったのは，社会の労働形態の発展が資本主義的方法によって進められたからである．．．．西ヨーロッパの工業的発展の歴史を，そっくりそのまま繰り返すことが，ロシアにとって不可避であろうか？．．．わが国の大工業にとっての歴史的特性は，他の国々がすでに高度の発展段階に達したときになって，やっと成長しはじめることになったところにある．このことから，二つの結果がもたらされた．第一に，一つの段階から次の段階へ，抜き足差し足状態で移行するというようなことなしに，すでに西ヨーロッパによって試みられたあらゆる形態を利用し得ること．すなわち，恐らく極めて急速に発展する可能性をもつこと．第二に，すでに工業的諸関係を確立して，経験をへた国々と競争することになるが，このような対立者との競争は，新におこってきた資本主義の微弱な成長を完全に抑え得ること．」[1] とくにこの後者についてのかれの論述は，きわめてドグマ的なものであり，多くの矛盾が露見している．しかしそれにもかかわらず，当時の論壇に於ては抜き難き説得力をもっていたのであろう．

ヴォロンツォフの考えによれば，西欧とくらべてのロシア資本主義の特徴は，生産物の生産ではなくて，主として販売の分野を占めていることである．生産は小規模なものとしてとどまっていて，この小生産者が資本家=商人に完全に従属しているということに於てのみ，資本の力があらわれている．それ故に，ロシアの資本主義は，西欧に於てその一部は果されたところの歴史的使命——直接生産者を養成すること，かれらを集団労働に慣らすこと，階級的自覚をつくり上げること等を，未だに果していない．西欧の同業者たちのもっている肯定的なものを持つことなしに，ロシアの資本主義はあり余るほど否定的な面によって占められている．つまりかれは，新しい生産形態をつくり出さないで，「以前と同じように自分の百姓小屋の中で働きつづける」小生産者たち大衆の貧窮化を惹きおこしている資本主義の現実を，するどく突くのである．そして，ロシアにおける生産の資本主義化がこのような進行状態にあるところに，労働の社会的発展の全過程を，人民の道，アルテリの道に方向転換させる希望の拠りどころを求めているのである．しかもかれは，ロシアにおける労働者の数が減少するという結論をも，ここから導き出した．この結論は，可成り長いあいだ，それが正当な科学的帰結であるとして，ロシア社会において認められていた．チェルヌィシェフスキーが依然として名声を得ていた中で，そのチェルヌィシェフスキーとの決定的な訣別を意味する二，三の言葉を序言の中に書かなければ，かれのこの著書はもっと大きな評価を得たであろう．

この著書にたいする多くの批評の中で，ミハイロフスキーのものはきわめて特徴的である．ミハイロフスキーは，この著書のもつ最大の欠陥を，資本主義にたいする寛大な態度であるとした．前述のように，資本主義が西ヨーロッパにおいては大きな歴史的使命を果したことを，ヴォロンツォフは認めている．ミハイロフスキーにとっては，資本主義の積極的な面にたいするこのような認識が，すでに不満の因であった．ツガンは「ミハイロフスキー氏は恐らく“資本論”などという本を知らないのであろう」と言って，資本主義への無理解をとがめているが，ミハイロフスキーが資本主義的生産形態の歴史的意義について，科学的認識を得ていなかったことは確かであろう．

1) В. П. Воронцов, Судьба капитализма в России, СПБ. 1882, стр. 13-14.

この著書についてのもう一つの論文，Русанов による「経済的楽天主義に抗して (Против экономического оптимизма)」(“Дело”, No. 12, 1880) も注目に価するものであろう．とくに，かれがヴォロンツォフの市場論を補足して次のように述べていることは興味深い．「ロシアにとって市場は充分でない．．．．ロシアの資本は，一千万のクスターリの軍を終局的にその手中に集めることができる．独立のクスターリというのは，現在ではひくい鳥 (жар-птица) のようなつくり話である．．．．クスターリ，小さな職人——これがわが国の資本主義の基本的な細胞である．．．．クスターリ工業が小生産者の独立経営としてではなくて，本格的な工場主たちと同じような，資本をかせぐクラークのためにする仕事の一つとしてであるのは，如何なる段階であるのかをたしかめようとするクスターリ工業の研究者たちの発言は，傾聴に価する．クスターリ工業の現在のかたちと資本主義的生産形態とのあいだには，はっきりした同類性が存在する．クスターリ工業は，構外にある工場の一部となっている．クスターリは低い賃金できわめてしばしば，企業家たちによって委ねられた物(素材)を自家加工している．マニュファクチャーにおけるクスターリ=労働者 (рабочий=кустарь) たちの統合——これが近い将来におけるロシア資本主義の自然の形態である．」

V

ルサーノフの考え方にきわめて近いものとして，80 年代の評論家 Н. Ф. Даниельсон (Николаї-он) がある．かれは 1880 年 10 月，雑誌 “Слово” によって論壇に登場した．「改革後我国の社会経済概要 (Очерки нашего пореформенного общественного хозяйства)」という論題は，この雑誌論文のときからのもので，のちに 1893 年，同じ題名の単行本となった．この著作と前後して，チェルヌィシェフスキーの弟子でマルクスとともに第一インターの仕事をしていた Герман Лопатин を通じて「資本論」のロシア訳を完成した (第 1 巻，1872 年，第 2 巻，1885 年，第 3 巻，1896 年) のであるが，この翻訳の途中でマルクス，エンゲルス宛にしばしば発した質問は，「ロシアは資本主義を経ることなしに，国民経済の общественный уклад に直接移行することが可能ではないか」ということであった．この著作はロシアの出版史上はじめて豊富に統計資料をつかったものであり，出版後しばらくのあいだ統計操作の一つの雛型と目されていた．1899 年に独訳，1903 年に仏訳が出たが，この時期のロシアの経済文献でこれ程に外国語訳されたものは殆んどない．尤もこれには，オンがマルクス，エンゲルスと往復していたという事情も考慮しなければならないであろう．

オンの「概要」が単行本として出版されると，その翌 1894 年に，П. Б. Струве の「ロシアの経済的発展の問題についての批判的覚書 (Peter von Struve, Zur Beurtheilung der kapitalitischen Entwicklung Russlands.) “Socialpolitische Centralblatt” No. 11, Oct. 1893」が出されて，之に批判を加えた.[1] ナロードニキ側は直ちにこの批判に応じ，オンは “Нечто об условиях нашего хозяйственного развития” (“Русское богатство”, 1894

1) この著書については，レーニン「ナロードニキ主義の経済的内容とストルーヴェ氏の著書におけるその批判」，соч. изд. Т. 1 および С. Л. Франк, Библиография П. Б. Струве. 1956, N.Y. Изд. Чехова を参照.

No. 4～No. 6) を以てこれにこたえた．この論争の中に Туган-Барановский の "Промышленные кризисы в современной Англии" 1894. が登場し，(1) ナロードニキの理論が「無条件で誤り」であること，(2) 資本制生産は消費手段よりも生産手段によって市場をつくり出すこと，(3) 生産物乃至剰余価値は，外国市場がなくても実現可能であること，などを解明し，所謂崩壊理論を展開するわけである.[1]

ともあれ後に，レーニンの「ロシアにおける資本主義の発展 (Развитие капитализма в России)」をはじめとする多くの批判が出てからは，オンの使った統計は社会経済史的には無意味なものであり，却ってその資料の豊富さの故に正しい判断を邪げるものとされるに到った．この点では，ヴォロンツォフの統計もまた同様の運命をたどった．オンにしてもヴォロンツォフにしても，およそ官庁統計であれば，如何にその根拠が薄弱であってもすべてこれを信じている．それはまだいいとしても，これらの官庁統計に用いられた数字のあらわしていることについて，これらの資料そのものの中にある解説をも理解していなかった．だから，全然別のもの(つまり，比較にならないもの)を比較対照するというようなことが再三行われている．

ここではオンの統計については一応問題としないことにする．そのような統計技術上の問題点はあるにせよ，オンの所説にふれないわけにはいかない．「概要」は二部に分れている．第一部は，穀物の生産と流通とを社会経済のいくつかの他の要因と関連させて取扱い，農業所得資本主義化のメカニズムを明らかにすることを以て目的としている．第二部は工業の問題を扱い．営業の資本主義化過程をそれに随伴する社会的諸要因とともに解明しようと試みている．

単行本となったのは，はじめ "Слово" に掲載してから 10 年以上も経っているのであるが，オンは殆んど何等の加筆もしなかった．このことについてかれは，その序言のなかで，「何故もっと新しい資料に基いてやらないのか？何故 70 年代の資料を次の 10 年間の資料にとりかえないのか？」という質問を仮設し，「70 年代と 80 年代の国民経済に本質的な相異はない」としてこれをしりぞけている．

かれの所論の骨子は，その著書の最初の数頁にハッキリと述べられている．

「宣言 (1861 年 2 月 19 日) の原則――土地を農民に分与すること，あるいはもっと広く言えば，生産性の最高度の発展のために，また従って全人民の経済的伸張を最もよく保証する諸条件をのばすために，生産者自身に労働用具を供給すること，この原則は西欧諸国の経済体制が拠りどころにしている原則とは，言うまでもなく撞着している．クリミア戦争はロシアをして西欧との，従ってまたその経済的諸条件との接近を余儀なくし，結果として，わが国には二つの経営形態のたたかいが生じた.」[2] そこでオンは，この二つを明らかにすることを「概要」の課題としている．もちろん，ここに言う二つとは，かれの説明によれば，「生産用具が生産者自身に属する生産形態」と「資本家的な経営形態」とである．「一つの形態の発展は，生産者をいよいよ生産物に近づけ，反対に，もう一つの形態の発展は，生産物を生産者から引きはなす．一言でいえば，一つの形態が他の形態と完全に排反している．2 月 19 日の宣言は，第一の形態のものである．第一の形態には，発

1) 佐藤博，ツガン・バラノフスキー，(北大「経済学研究」第 2 号) 参照.
2) Николай-он, там же, стр. 2.

展の保証がある．資本家的経営形態にとって，わが国はそのところを得ていないように思われる．だがこれは，そう見えただけであった．実際にはそれは，立法者による第一の形態の宣言と同時に，第一の形態とのたたかいに入ったのである.」[1)]

このたたかいのかたちと，そこからみちびき出されるであろう諸結果とは，オンの眼には，ヴォロンツォフが考えたのとは著しく異ったものとして写った．すなわち，ヴォロンツォフの場合は，ロシアにおける資本主義の成功の幻想性をかたく信じ，この確信を自分の読者たちにも押し拡めようとしている．ルサーノフの言葉をかりるならば，ヴォロンツォフはゆるがしがたい「経済的楽天主義」に陥っていた．ところがニコライ・オンの場合は，ロシアの経済的過程を直視し，それをまったく「暗い」ものと見ているのである.「概要」第一部の結論の中で，かれは次のように言っている．

「土地への資本投下，その歴史的使命の遂行を，わが国では，生産者に労働用具を分与した“法令”がさまたげている．資本主義的経営をこそ，改革後の国家のあらゆる経済活動が可能にしている．これら二つの，たがいにかち合う進路は，わが国が遭遇するあらゆる矛盾の源をなしている．だが，資本主義の流れが優勢である.」[2)]

ニコライ・オンは，ヴォロンツォフと同様に，西ヨーロッパにおける資本主義が重要な歴史的使命——労働の社会化をなしとげたし，またなしとげつつあることを認めている．しかし，ロシアに於ては資本主義が破壊的な役割を演じているという点については譲らないのである．この著書の最後の結論には，次のような言葉がある．

「飢餓こそ，わが国の工業が最近 30 年間に採用した形態が，（ロシアに）適合していないことの直接の結果である．わが国の何世紀にもわたる伝統を保持する代りに，生産手段と直接生産者とが結びつくという，わが国に伝承された原則を発展させる代りに，...これらすべての代りに，わが国はまったく反対の道を辿ったのである.」[3)] 農民の労働が穀物市場における交換過程で，商業その他のあらゆる仲介資本によって搾取され，おまけにアメリカの穀物までが市場競争に参加してきた．アメリカでは一般に生産に必要な労働時間は短縮され，価格は下落した．ところがロシアの農民の生産諸条件は昔のままで，依然として穀物を得るのに多くの時間を要した．つまり，タダ働きをしてきた．その結果，支出は増大して，収入は減少した．そこで農民は自分の農具をふやすことが出来ず，土地を拓きつくされ，いよいよやせてきた．それが 91 年の飢饉の前提となり，この飢饉は資本主義発展による農民の窮乏の避けがたき結果である，と言うのである．そして，「解決すべくロシア社会に提起された課題は，日毎に錯綜している．資本主義の占める範囲は日毎に拡大し，その上，同時に，従業労働者とかれらの生存するための諸手段との数は減少している．人民的生産は資本主義的生産に場所を譲った.... 解決しなければならなぬ大きな課題が，ロシア社会に提起されている——極く少数ではなくて，全人民がその生産諸力を利用し得るようにする生産形態の中で生産諸力を発展させるということである．それはきわめて困難ではあるが，不可能ではない．共同体的土地所有は，その上に将来の社会経済の建造物が打ち建てられ得る生産の物質的諸条件の中の，基本的なものの一つである....

1) Там же, стр. 3.
2) Там же, стр. 71.
3) Там же, стр. 322.

科学的農業と近代的大工業とが，わが国では共同体に接ぎ足されねばならぬ．発展か，退化と死とか，社会経済組織にとっては，別の道はない．直接生産者の手中での農業と加工々業との統合に，中途半端な生産単位によって――それは「一般平凡人を何時までもうだつの上らぬものにすること」と同じであろう――ではなく，巨大な，社会的な，一般化した生産をつくりだすことによっての統合に，あらゆる努力を集中すること以外に別の方法は残っていない」.[1)]

何としてもヴォロンツォフとニコライ・オンとは，ロシアにおける資本主義的経営発展の肯定的な面を否認する流れの，典型的な代表者である．かれらにとってこれは，「人民的生産」の独自の諸関係に代って，外からとり入れられたブルジョア的諸関係の「強制的」植付であった．ここに二人の間の大きな類似点がある．

しかしながら，かれら自身の積極的な考え方については，可成り大きな本質的相異があると言えないだろうか．オンは，ミハイロフスキー，ルサーノフ等とともに，それが如何に階級的色彩を失ったものであり，同時に何等かの現実的な経済問題との実際的結びつきを失ったものであるにせよ，ロシア社会思想の中にあって，積極的な抗弁をする一つの流れを代表していたと考えられる．

この流派[2)]は，固定的にはどの経済的階級にもくみしない，したがって階級的利害からきわめて自由なロシアのインテリゲンツィア――ロシアの諸条件によっつくり出された特殊な社会的グループ――の理想や考え方をあらわしていた．すでに頻繁な西欧との往復によって，西欧のもっとも進歩的な理想は間断なくこの流派の諸理想の中に汲み入れられていた．この流派の代表者たちの間では，ロシアの経済的特殊性(後進性)を理想化することが屢々行われたが，この流派の理想主義者たちの夢想とかあるいは国民的偏見ということだけで，このことを説明し去ってよいであろうか．かれらが直接に経営の「最高形態」に転化し得ると考え，資本主義に対する和解しがたき敵意を抱いていたのは，ロシアの資本主義的発展の未熟さの結果である――それで完全にかれらの流れのすべてを説明しつくされるであろうか．国の経済的発展法則に殆んど関心を示さなかったミハイロフスキーの場合は，かれが前世紀末の最もはげしい「空想主義」的流れの代表者であったとしても或程度首肯することができるであろうが，オンの場合にも同じ様に取扱うことができるであろうか．仮りにオンそのものは「空想主義者」であるとしても，かれを支えていたものの中には再検討を要する多くの問題が残されていると思う.[3)]

たしかに，「概要」の構成は，オンが空想主義者であったことの証明になるであろう．すなわち，かれは「資本主義の流れ」がロシアにおいて「優勢である」という自分のテーマを証明するために，果しない一連の数字を引用している．その続きに，ロシアにおける資本主義の成長を示すべき統計分析の結果として，いきなり，「巨大な，社会化され，一般化

---

1) Там же, стр. 344-346.

2) ツガンもまたオンの流れをこの様に解釈し，「この流派の父はチェルヌィシェフスキーであると考えることができる」(Туган, там же, стр. 438) と言っているのは，われわれが所謂「連続，非連続」の問題を考える場合の，大きな手懸りになるのではないかと思う．

3) 例えばミハイロフスキーについて，最近それが本来の自由の流れであると提唱した Billington, の論拠の中には，事実として首肯すべき多くのものが含まれていると思う．Mikhailovsky and Russian Populism, 1958, Oxford. (松田道雄氏による紹介がある．「思想の科学」1959 年 No. 3)

された生産」をつくり出すべき「ロシア社会」への呼びかけが飛び出してくるのである．それではこの「つくり出す力」は，ロシア社会の中のどこから引出されるのか，何故にロシア社会はこの創造にとりくむことを望むのか．この創造はどの程度に，如何なる方法で実現し得るのか．「社会化された」生産の創造は，ロシアの現実の政治的，法律的，文化的其他の諸条件に適合しているのか．こういういくつかの設問に対して，「概要」に関する限りでは，オンは殆んど追求していない様に思われる．通じて言えることは，オンは商品生産の法則と範疇をロシアの農民経済に適用することを否定しているということである．

とは言え，かれが極めて真面目に現実を直視しているのを否定することはできない．かれはロシアにおける資本主義の成長と，営業及び農民経営一般の凋落とを否定していない．この点でオンは，現実に対しては楽天主義の烙印をおされることはない．マルクスの方法に従って大経営と小経営とのたたかいを叙述し，ロシアの経済に対する資本主義の影響を充分に述べている．たとえばツガンなどは，それが過大に失するとして非難しているくらいである.[1] 問題なのは，前述のごとく，オンの論述に余りにも大きな飛躍があることである．ヴォロンツォフはその第二著「理論経済学概要 (Очерки теоретической экономии) 1895」の中で，オンの「実際的結論」を，ためらうことなく「空想」であるときめつけている（同書 219 頁）．とくにヴォロンツォフのとりあげるのは，信用の方法によって農民経営を引き上げようという意図を覆えさんとする志向である．オンの考えでは，信用は単に富農＝商人の発展を可能にするばかりで，個人であるにせよ共同体であるにせよ，とにかく直接生産者にとって信用は何の役にも立たないものであるとする．ヴォロンツォフはこの信用による方策を，その好んで用いた「小さな事業」ということばの一つの内容としていたのであるから，ここに一つの交互点が生じたのは当然のことであろう．またここで，ヴォロンツォフがロシアにおける資本主義は，主として流通過程を支配していると考えていたことを，今一度想起しなければならないであろう．

ヴォロンツォフは自分とその流派に，ナロードニキ主義という呼称を用いていたが，それはかれが，自分の立場と理想とによって，「人民」——あるいはヴォロンツォフの眼中で人民（ナロード）を擬人化した農民——に近くあることを強調しようとしていたのだとも言い得よう．事実，ヴォロンツォフ等を中心とするナロードニキたちの実際的な仕事は，農民経営の現実的必要に基いた社会的綱領をつくり出そうとする試みであったことも認めなければならない．ただ，この綱領はその後のロシアの経済的発展過程の中で，中位の農民経営が存立する可能性が薄くなったことによってその意義を失ったと見るべきであろう．農民銀行，クスターリ銀行，貸付信用会社，アルテリ，ゼムスキー・スクラード，博物館，村付の農業技師等々，ナロードニキたちによって引き出された種々様々の農民援助の方法は，もちろん大きな意義をもっている．しかしながら，これらの諸方策がさしむけられているところの社会的階層——中位の農民層の経済的状態を決定づけている要因としては，あくまで副次的なものであるということを確認し，そこに過大，或は過少評価があってはならない．

ヴォロンツォフによって代表されるナロードニキ主義の流れは，それがイデオロギー的な利益代表者であったところの中位の農民層が人口の多数を構成している状態の下では，

1) Туган, там же, стр. 439.

大きな影響力をもっていた筈だと考えられる．ところが 90 年代に入ってからは急速に信用を失い，とくにインテリゲンツィアの間でのあらゆる影響力を失ってしまった．オンやミハイロフスキーが，ロシアのインテリゲンツィアの間にまだ大きな支配力をもっている時，一方のヴォロンツォフはまったく見捨てられ，孤立に追いやられてしまった．本来は，ロシアの大部分を占める農民の身近かな経済的要求をかかげて登場したこの流派の，この奇妙な成行きは，一体何が原因しているのであろうか．

若しもナロードニキが，「小さな事業」の宣伝によって直接農民層に話しかけることが出来たなら，もちろん，この宣伝はきき入れられたであろう．ところがヴォロンツォフの置かれた条件の下では，主として，農民層とは直接に何の関係もないインテリゲンツィアのあいだで，この「小さな事業」の宣伝をしなければならなかった．

もしオンが経済政策の分野に於て理想主義者であるとするならば，ヴォロンツォフは経済過程の理論の分野に於て，これに劣らぬ理想主義者であった．ヴォロンツォフはすでに明白となっていた資本主義経営の成功の事実を認めようとせず，ゆるぐことなき「楽天主義」のために，かたくなにもそれを断固として拒否した．「小さな事業」に対するこのゆるぎなき確信と，きわめて重要な意味をもった現実の事態の経過に眼をとぢていることとは，農民大衆の前でヴォロンツォフの立場を失うことにはさせなかったであろう．農民大衆は，「小さな事業」のささやかな利益のために，ヴォロンツォフの理論の大きなあやまりは追求しなかったであろう．だが，インテリゲンツィアにとっては，政治的な面での日和見主義と結びついたヴォロンツォフの理論構成の根拠薄弱さが先づあらわれてくるので，経済政策に関するかれの所論の極めて現実的な面が，全く影をひそめてしまうのである．

以上，ヴォロンツォフとオンについてその所説を概観したのであるが，簡単に要約してみよう．それぞれに共通な点は，ロシアの資本主義に対する否定的な態度である．それを一言でいえば，ヴォロンツォフはロシアにおける資本主義を不可能であるとし，オンは不必要であるとしていた．また相異なる点は，一方の流派の日和見主義ともう一方の流派の急進的な理想主義である．だがこれら二つは，鋭くあらわれた民主主義的，別言すれば，人民主義的性格を帯びており，このことが当時のロシア社会の中での他の流派と大きく区別さるべき所以であろう．[1)]

以下かんたんに，これらの流派の周辺の動きについてのべる．ブルジョア自由主義的な流派は，何よりも官僚の支配下にあれば好都合であった．機関誌“Вестник Европы”の性格は，ブルジョア的であるよりも遙かに自由主義的であった．つまり，少くとも表向きには，その代表する階級的な彩色は殆んど施されていなかった．この雑誌の経済綱領は，次の点でいちじるしくナロードニキのそれとは異っていた．すなわち，巨大な資本主義的生産も，少さな，手工業的なクスターリや農民の生産も，等しく存在と発展への権利を持っているともるのである．つまり，自由競争の原則である．ヴォロンツッフもオンも，「真の」マルクス主義者であると自称していたが，一方，Л. З. Слонимский を代表とする「ヨーロッパ報知」は，マルクス主義との原則的なたたかいをすすめていた．スローニムスキーの理想は西ヨーロッパのブルジョア体制であり，ロシアにおいてこの体制を実現する方法は，

1) 言うまでもないことながら，この時期に社会民主党はまだ結成されていない．

自由主義的な精神でのロシアの立法改革であるとする．国際経済の分野での「ヨーロッパ報知」の主張は，言うまでもなく自由貿易主義であった．その経済綱領について言えば，ドイツの講壇社会主義者たちの諸流派と，当時すでに西ヨーロッパ大陸ではフランスに於てだけ命脈を保っていた純粋の自由貿易主義者たちとの中間に位置していたと言うことができよう．

保護主義と工場法とに対する反対は，もちろん農業部門から生じた，土地所有階級の中からは，保護主義に対してのみでなく，工業及び財政政策のすべての方法に反対が絶えなかった．とくに，幣制改革に対しては，執拗な反対がつづけられた．資本主義工業の成長に対する農業(地主)的立場の典型として，1890 年の関税改正に対する帝国自由経済協会の請願 (Ходатайство Имп. В.Э.О. об изменениях в русском таможенном тарифе. СПБ. 1890) をとり上げることができよう．この長文の請願は，古来の，人民的，保守的なものが資本主義によって打ちこわされて行くことの害を実例を挙げて説き，資本主義を捉進しようとする関税改正に反対している．だが，1891 年の税率は保護主義者たちの勝利に帰した．この際，「モスクワ報知」が先頭に立ったことは当然であるが，多くの民族主義的なジャーナリズムが保護主義者に味方した．ここで考えなければならないことは，ピョートル治下の工場の場合もそうであったように，政府は工場生産の発展を奨励しつつ，「所謂」国家計画——即ち，国庫をみたすために国民の支払能力を増大しようとつとめてきたという事情である．つまり，この場合は，工場主たちの階級的利益だけでは説明し尽されない諸要素——たとえば，ナショナリズムの発展をもそこに窺うことができる．

後　　記

本稿で主として用いた参考文献は，オンの「概要」，ツガンの「工場」の外に，А. Л. Рэуэль, Рсская экономическая мысль 60-70 х годов XIX века и марксизм. М. 1956 及び П. И. Лященко, История народного хозяйства СССР, Т. II, 1952. がある．これらのうち，主体となったのはツガンとオンのものである．従って，本稿での取扱いは，「全面的」というには決して価しないものであろう．

本稿は経済思想の問題を辿ったので，政治史及び政治思想史の問題との関係づけが行われていない．П. Н. Ткачёв との関連における Л. Лавров 及び М. А. Бакунин の動きについてはふれなかった．Г. В. Плеханов についても同じである．

最近モスクワ大学経済学部から出された Н. К. Каратаев, Экономические науки в московском университете (1755-1955), М. 1956 を見ると，1874-99 年の 25 年間講壇をまもっていた Чупров 等を中心として，大学の側から見た「資本主義の運命」論争がわかるのであるが，本稿の中にはうまく繰り込めなかったので，これについても別の機会に譲らざるを得ない．

尚，ミハイロフスキーを以て近代自由主義の基幹であるとする考え方，例えば J. H. Billington 氏の近著 (Mikhailovsky and Russian Populism, London, 1958) に接し，ここに言う自由主義と経済(資本主義的)発展の頑強な否認とをどの様に結びつけて考えられるのか，私にとっては一つの疑問として残される．

Arguments on the "Capitalism" in the latter half of 19th century in Russia

by SATOSHI YAMAMOTO

This article treats the period during which the question of the "development of capitalism" was discussed in the field of journalism as one of the so-called "Russian problems". But it does not cover the years when the subject of the "development of capitalism" gave rise to much controversy in the transactions of Vol'noe èkonomičeskoe obščestvo (The Free Economic Society).

The main subjects of this article are 1) views expressed by the scholars who insited upon free trade in the decade of 1850–60 — in comparison with those in the former ages. The materials have been drawn from the organs "Duch žurnalov", "Ekonomičeskij Ukazatel'", "Vestnik promyšlennosti". The works of I. V. Vernadskij, L. Tengoborskij, I. Gorlov have been discussed in this connection. 2) views on free trade in 1860 s, with regard to the work of Bervi-Flerovskij and the Protocol of the First Session of the All-Russian Commerce and Industry Conference. 3) N. K. Michajlovskij's opposition to the capitalism. 4) V. P. Vorončov's "Sud'ba kapitalizma v Rossii (The Fate of Capitalism in Russia) and Rusanov's "Protiv èkonomičeskogo optimizma (Against Economic Optimism)" 5) Daniel'son (Nikolaj-on)'s "Očerki našego poreformennogo chozjajstva (Outlook on our Social Economy after the Reform).

The author took into his consideration the criticism of Tugan-Baranovskij on the arguments pro and con of capitalism. Generally speaking, what is traced here are the ideas and thoughts in economy, not the ones in politics. So, the author did not refer to the activities of Lavrov and Bakunin in connection with Tkačev, nor did he consider Dr. J. H. Billington's new work on Michajlovskij as a leading spokesman of the populist movement. As to these problems he hopes to treat them, if possible, in one of his subsequent articles.